

住まいの大阪学連続セミナー

# 世界の住まい・まちづくり セミナー1:イギリス編

日時：2007年2月11日 14:00~16:00

講師：佐藤健正（都市計画プランナー）

場所：大阪市立住まい情報センター 3階ホール

## I 開会

### 講師紹介

司会：それではセミナーをはじめたいと思います。本日はイギリス編です。まず最初に本日の講師、佐藤健正先生のプロフィールを紹介いたします。佐藤先生は、東京大学都市工学科を卒業され、(株)市浦ハウジング&プランニングに勤務、現在その代表をされています。ご専門は都市計画・都市設計です。主な実績としては、わが国においては、関西文化学術研究都市、大阪国際文化公園都市などがあります。最近では、中国・北京市や上海市の都市開発プロジェクトを手がけております。また、趣味と実益を兼ねて、イギリスをはじめ海外の住宅地に数多く訪問され、写真を数多く保有されております。本日は、イギリスの写真を数多く取り揃えてご紹介していただきます。とても楽しみなセミナーになると思います。それでは佐藤先生、よろしく申し上げます。

## II 講演

佐藤：みなさんこんにちは。いまご紹介いただいた佐藤です。これからイギリスの住まいまちづくり、ハウジングをテーマでお話をしたいと思います。ハウジングを巡るバーチャルな旅という感じですねと勧められるといいと思っておりますが、いまから訪れる場所、テーマについては、お手元のペーパーにキーワードとして整理しておきましたのでご参照ください。

### はじめに 「ハウジング」という概念

ところで、ハウジングという言葉は耳慣れないかもしれませんが、まずはハウジングという言葉の意味について簡単に説明します。一言でいえば、「誰もが適切な住まい、良好な環境に暮らせる社会をつくる取り組み」のことをハウジングと呼んでいます。そのためには、1. 一定の質を備えた住宅地を計画的に作る必要があり、2. 住宅に困っている人に住宅を供給することや、新たに建つ住宅に適切な水準・ルールを決める社会的な取り組みが重要です。さらに言えば、3. 居住者自らが住まいと身の回りの環境を守り育ててい

くことが必要になります。ハウジングとは、そうしたことを含む全体の概念、考え方のことを言います。

イギリスは、世界に先駆けてハウジングに対する取り組みを進め、それによって今日のまちなみ、都市の風景がつくられてきました。これからイギリスの国や人々がどのようにしてハウジングに取り組んできたかをご紹介します。

## 1. 18—19 世紀のタウンハウス・スクエア開発—イギリスの伝統的都市住居様式の成立

### ■ ロンドンにおけるスクエア開発の発展

最初に、イギリスの伝統的な都市住居の様式、タウンハウスについて説明します。直訳すれば「町家」です。

この最初の地図はロンドンの中心部、ブルームスベリー周辺の航空写真です。大英博物館のあるあたりです。みなさんがこの辺りを訪れると、3～4 階建ての連続する建物、その建物の間に囲まれている庭園広場、ガーデンスクエアが数多くあることに気付かれるはずです。これは 17 世紀末に始まり、18～19 世紀の住宅地開発によって集中的につくられたものです。この時期の開発を、タウンハウス・スクエア開発と呼んでいます。

タウンハウスは、18～19 世紀当時台頭してきたイギリスの中産階級のための新しい生活の場として急速に広がりました。1666 年、当時のロンドン市街地の大半を焼失するような大火災が起きました。今日我々が見る建物の大半は、その後に建てられたものです。ロンドン大火と呼ばれるこの火災を契機に、それまでの木組み建物が禁止され、レンガ造の建物にすることが定められました。また、建物の階数・高さ（階数高さ）が、前面道路の種類により統一されることになりました。幹線道路の場合は、4 階建てプラス屋根裏、一般の道路では 3 階建てプラス屋根裏、さらに狭い路地では 2 階建てプラス屋根裏という具合です。タウンハウスの建設は、そういったルールに基づいて進められましたので、整然と統一されたまちなみが出ています。

これは 18 世紀中に開発されたエリアを示していますが、タウンハウスとスクエアの住宅地開発は、当時の貴族階級が主にロンドン西側に所有していた土地を投機的に開発する形でおこなわれたものです。これをみるように、それぞれの所領を食い潰すような形でパッチワークのようにつくられています。

### ■ 「都市を造る住居」—タウンハウスの特徴とその魅力

19 世紀にはさらに速度が進み、開発が進められていきます。タウンハウスというのは、我々の長屋建て住宅に似ていますが、1 区画に 1 つの住宅、上下階に別の家族が住むことのない、連続建ての住宅です。1 階部分は、通りから 50cm～1m 上がり、玄関部分に階段とテラスがつけられ、テラスハウスとも呼ばれました。1 階部分が地上よりわずかに高くなっていることで、都会に住みながら、住まいの環境やプライバシーが守られる特徴を持っている

ます。

規模の大きな住宅では、敷地の背後にミューズ (Mews) と呼ばれる路地がつくられ、そこにミューズハウス (Mews House) という当時の馬小屋が作られました。現在、この場所は、高級住宅や洒落たパブ、店舗などに変わっています。

18 世紀、最も典型的な中流階層の住宅地です。建物が取り囲んでいる庭園広場、ガーデンスクエアの規模は様々ですが、この場合は約 100m 四方の大きさです。

タウンハウスの大きな特徴は、住宅が通りや広場に沿って連続的に建てられているということです。見方を変えると、タウンハウスが通りや広場という都市生活の場を形づくっていると言えます。それにより、通りでの生活があり、通りでの近隣関係が生まれ、そして通りのまちなみ景観がつくられる。私たちは、こういう建物を「都市をつくる住居」と呼びます。通り、街路に対して正面を向いて、街路自体を形づくるので「街路建築」という呼び方をすることもあります。タウンハウスはそうした都市住居を代表するものだと言っていいと思います。

建物全体の構成は統一されていますが、デザインは多様で独自性があり、見る人の目を楽しませてくれます。それぞれの通りでは、その表情・個性・通りの楽しさをつくり出しています。

アメリカに「ジェーン・ジェイコブス」という評論家があります。私が紹介する推薦本の中にも加えていますが、彼女は「都市の街路がおもしろく見えれば、その都市自体もおもしろく感じる。街路がつまらなければ都市そのものも退屈だ」と言っています。タウンハウスは、そういう通りの意味や楽しさをよく表す建物であり、ジェイコブスの言葉の意味をよく表しているといえます。

もうひとつのタウンハウスの特徴は、一連の住宅群の中心に共有の庭園広場という空間を持つことです。この図にもあるように、正方形・円形・三日月・帯状と様々な形をしています。よく言われるように、イギリス人の誰もが田園にあこがれ、田園的な趣味を持っているので、建物が密集した都会の中で、緑にふれあえるガーデンスクエアは、彼らの好みにピッタリだったわけです。

ガーデンスクエアは、当時イギリスで好まれた風景式庭園という形式でデザインされています。簡単に言えば、あるがままの自然、野生的な自然を表現しています。「ピクチャレスクデザイン」とも呼ばれます。庭園広場は、これを取り囲むタウンハウスの住人だけのプライベートな庭園で、周囲は柵で囲まれ、鍵を住人だけが持ちます。

タウンハウスの窓越しに見える庭園の眺めは、住宅にとって最大の価値です。庭をよく眺められる、2 階か 3 階に応接間を設け、ガーデンでお茶や交流を楽しむことが彼らのライフスタイルでした。集まって住むことで、ひとりひとりでは持てない立派な庭園のある暮らしが実現できます。そういう意味で、都市に集まって住む共同体の利点、あるべき姿の典型です。

## ■18世紀ロンドンに生じた変化—居住地の階層分離、職住の分離

先ほども申しましたように、18～19世紀には、こうした住宅地開発、中産階級にとってのベットタウン開発が進みました。このことによりロンドンに2つの大きな変化が生じました。1つは、居住地の階層分離。この時期、上流・中流階層はみな、狭苦しい街中を離れて、主にロンドンの西側、ウエストエンドと呼ばれる新しい開発地区に民族移動するわけです。一方、労働者階級はまちの東側・イーストエンドに住むという階層別の住み分けが進んでいきました。実はこの状況は、今日に至るまで受け継がれています。

一方で、中流階層の間で、職場と住居の分離、生活スタイルの変化が進みました。職場に通勤するという生活様式が進みます。それまでのロンドンでは、店舗も仕事場もすべて住宅と同じひとつ屋根の下にあって、商店主も工場の経営者もみな使用人たちと一緒に暮らしていましたが、この時から中流階級の人々は職場に通勤するようになります。

## ■バースのタウンハウス—「イギリスで最も美しい都市」を造る住居群

これはイギリスの代表的なタウンハウス、温泉保養地として有名なバースのタウンハウスです。イギリスで最も美しい都市のひとつに数えられます。

この18世紀のタウンハウス、この一連の建物は「ジョン・ウッド」という親子2代に渡ってこのまちをつくった建築家によるものです。正方形・円形・半円形など様々な形の広場が連続することにより、ダイナミックで躍動感のあるまちなみがつくられています。また大きな緑がありますが、自然と都市との見事な調和をつくりだしています。バースのまちはイギリス都市デザインの模範を示すものと言われています。写真は、住民がガーデン＝スクエアでパーティを楽しんでいる様子です。建物も庭園も、現代に見事に受け継がれています。

## ■リージェンツ・パークのタウンハウス—王室が開発した住居群

これは19世紀初期のロンドンのリージェンツ・パークのタウンハウスです。ロンドンで最も壮大な都市景観を誇っています。これらの住宅は19世紀の初め、イギリスの王室によって開発され、デザインはロンドンをつくったといわれる建築家「ジョン・ナッシュ」によります。元々、王室の狩猟場であった場所を市民の公園に開放し、裕福な市民のための住宅を建設したものです。公園は当時中流階級の人々の交流の場であり、リージェンツ・パークのタウンハウスはそういう場をつくり出す舞台装置としての役割を果たしています。公園は直径が1マイルあるといわれていますので、その外周3キロぐらいにわたり建物が連続しています。言ってみればただの住宅にすぎないのですが、その建物の美しさゆえに、ロンドンを象徴する場所になっています。イギリスのタウンハウスは、美しい住宅が美しい都市をつくるということをよく物語っています。

都市の住宅は、「それを建てる人、そこへ住む人へのためだけにあるのではなく、その前

を行き交うすべての人のためにある。」とよく言われます。住宅といえども、社会的・公共的な役割がある。だからこそ、住宅は美しくなければならないと、イギリスのタウンハウスを見るたびに感じます。

## 2. 近代ハウジングの原点—公衆衛生法と労働者住宅の建設

### ■19世紀イギリス労働者階級の状態—過密居住とスラム形成、汚濁の40年代

次に、19世紀の労働者の住宅の話を少ししたいと思います。タウンハウスが盛んに建設されていた18世紀後半・1760年代に、イギリスでは産業革命がおきます。それによってイギリスでは世界の工場として巨大な富を蓄え、中産階級が生まれ、彼らがタウンハウスの住人になります。この間、労働人口の流入で、1800年には約100万人であったロンドンの人口が、1900年には400万人を超え爆発的に増加します。そのため、都市内の環境は著しく悪化し、労働者の多くが過密で非衛生・劣悪な環境での生活を強いられることになりました。

イギリスの産業革命は1930年代に完成したといわれますが、その直後の40年代は「汚濁の40年代」といわれるほど混乱した状態でした。労働者の多くは先ほど言ったイーストエンドといわれる東部のスラム街に居住し、19世紀半ばごろには、ロンドン人口の3分の1ぐらいがこうした過密で非衛生なスラム状態の居住地に住んだといわれています。

### ■世界初の公衆衛生法、住居法の成立とその展開—ハウジングという概念の成立

そうした経験を経て1848年にイギリスでは、衛生状態を改善すべく世界初の公衆衛生法ができます。つづいて51年には、これも世界初の住居法が定められます。これらが世界のハウジングの歴史上でも重要な出来ごとになります。1875年には、非衛生な住宅を全面的に除却するようなクリアランスの制度ができますし、同じ年に自治体が建築条例で新たに建てられる住宅の基準を定めるという制度もつくられました。さらに1890年には自治体公営住宅制度という、労働者のための低家賃の住宅を地方公共団体が建てる制度がつけられます。

### ■1875年公衆衛生法の成果—条例住宅地の拡大

そのなかで1875年の公衆衛生法というのは、建築条例により住宅と住環境の質を確保する仕組みを確立した画期的なもので、その後のイギリス住宅地の形成に非常に大きな影響を及ぼしたものといえます。

ここに標準条例(1877年制定 Model By-Law)で定められた住宅建設の基準を簡単に説明しています。例えば前面道路幅は最低11メートルとし、建物高さに応じて背後の敷地の奥行きを確保することが決められて(最低3m)、日照・通風・採光を確保する条件が定められています。

19世紀後半から20世紀にかけて、この条例に基づく住宅地・条例住宅地(By-Law Housing)

が労働者階級の住宅地として大量に建設されました。

これも民間の住宅地開発により市場のなかで開発されたものですが、住宅をできるだけ高密度に詰め込むように間口が4~5メートルと非常に狭く、かつ土地を無駄なく使うように、道路はあくまで規則的に短冊状につくられています。こうしたまちがいまでもロンドンの中心を少し離れた周辺部にたくさん残っています。このような衛生思想によってつくられた住宅地—単調で退屈なまち—が、その後どんなに衛生的でも、それだけで人の住む家といえるのかという批判を受けることとなります。確かに楽しさや美しさには欠けていますが、しかし、労働者の居住水準を飛躍的に高めたという意味で、歴史上大きな意味を持つものといえます。

### ■慈善的住宅改良運動とモデル住宅建設—民間非営利組織の活動

一方この時代に、民間の慈善団体やモデル住宅会社といわれる非営利組織（広義での）が、労働者のための計画的な住宅地をつくろうと取り組んでいました。いずれもこの非営利組織は、出資者に対する配当を出来るだけ低利に抑えて（4~5%程度）、市場のメカニズムのなかで計画的な低家賃の住宅をつくる取り組みでした。いま見ていただくものもそのひとつです。

当時のモデル住宅会社によりつくられた労働者の住宅です。今は大きく改装されて高齢者の居住施設になっていますが、20世紀の初めに建てられて、いまでも現役で役目を果たしています。当時の労働者の住宅街・スラム地域にこういうモデル住宅が数多く建設され、今でも残っています。

多くの場合はそうはいつでも一定の家賃負担が必要で、ある程度収入のある熟練労働者等だけが住めて、貧しい一般の労働者にはとても手が届かなかったというふうにもいわれています。後で見ていただきますが、自治体や政府に先駆けて計画的な住まいまちづくりを民間の非営利組織が取り組んでいたんだということは、注目に値します。

### ■ロンドン州議会（LCC）の取り組み—公営住宅建設の開始

先ほど触れたように1890年に総合的な住居法ができ、それによって自治体公営住宅というものが建設できるようになりました。その際にロンドン州議会—ロンドン市に相当する組織ですが—がさっそく大規模な住宅地の再開発事業を開始します。このバウンダリーストリートという地区はその最初のもので、1,000戸ほどの住宅が建設されました。建物の寿命は最低60年、一般には100年と定め、当時としては非常に質の高い住宅を建設しました。今はイギリスで現存する最古の自治体公営住宅といわれ、住宅協会という非営利組織によって建設当時そのままの姿を留めています。

これも同じ時期の再開発の例です。

いずれの地区でも住宅だけではなく、公園・学校・図書館・その他のコミュニティ施設が一体的に計画されています。そして非常にきめ細かく繊細なデザインが施され、豊かな色彩も備えています。この時代のイギリスの人々が、労働者の低家賃住宅であっても単に健康な住まいを提供するだけではなく、人々の精神を高めるような、美しさや心地よさを兼ね備えたものであるべきだと考えていたことがよく分かります。

### 3. 田園郊外と田園都市—イギリスが生んだユートピアモデル

19世紀末から20世紀初めにかけてのユートピア、理想社会への取り組みについてお話しします。

#### ■モデル工業ビレッジ—博愛主義資本家によるユートピア建設

19世紀の後半・ロンドンをはじめ、大都市の環境は悪くなる一方でありました。そうした中で工場経営者の中に、環境の悪い都市の中ではなく、いっそのこと田舎に広い土地を買い工場と労働者の住宅を建設するほうがよほど生産的ではないかと考える人たちが現れます。この時代の田園地帯に工場と労働者住宅を一体につくる取り組みは、今では「モデル工業ビレッジ」と呼ばれています。

その代表的なものの一つにバーミンガムの郊外につくられた「ボーンビルビレッジ (1879～)」という村があります。ジョージ・カドベリーというチョコレート工場の経営者が自らの工場と労働者のための住宅をこの場所に建設し、合わせて教会や学校・公園・病院・図書館など日常生活に必要な施設を一体的につくりました。今で言うコミュニティ計画の先駆的な試みです。

広い敷地に田舎風の外観を持つ住宅が建っています。自然の地形が尊重され、あるがままの田園風景の中に村落が存在するような景観が生み出されています。単にゆとりのある環境をつくるだけではなく、労働者が健全に暮らすために、すべての住宅に家庭菜園を設ける試みが行われています。

それからこのボーンビルでは、町の運営をボーンビル・トラストという財団が行い、まちの収入（住宅家賃その他）をまちの改善のために再び投資する画期的な仕組みも導入されました。彼らの思う理想社会の実現に取り組んだ様子がわかります。

一方これはリバプールのまちです。「サンライト」という石炭をつくっていたレーバーという企業家がつくった「ポート・サンライト (1888～)」というモデルビレッジです。

このあたりの伝統的建築様式の木組み建物（ハーフチンバー）が中心になっていますが、それ以外にも様々な住宅タイプが導入され村ができています。

ここでは当時、アメリカから導入されたフォーマルデザインという、景観デザインの手法が用いられています。モニュメンタルなスケールの大きな景観ができていて、これが町の特徴になっています。

モデル工業ビレッジは労働者の住宅地ですが、その労働者の住宅地に「美的原理」とい

う新しい価値観をもたらしたことで、今でも高く評価されています。イギリスの人々にとってはなにか懐かしい景観ですから、休日にはけっこう多くの人が集まる場所になっています。

### ■ベッドフォード・パーク—鉄道沿線郊外住宅地開発の原点

さらに19世紀の半ば頃、イギリスではいわゆる旅客鉄道や地下鉄が開業します。そして、鉄道沿線に中流階層向けの郊外住宅地が数多くつくられるようになっていきます。ベッドフォード・パークというこの住宅地は、イギリスで鉄道沿線開発の最初の例といわれています。また、「ピクチャレス・ビレッジ」と呼ばれ、風景画に描かれたような村というコンセプトを確立したことで有名です。

この時代・産業革命後、中流階層が力を強めてくるわけですが、その中流階層が当時憧れた生活というのが、ここに描かれているような田園生活というようなものであったといわれています。この時代多くの画家が、ここにみられるような田園生活の水彩画を描いていたようです。

当時の郊外住宅の住宅設計は、アーツ&クラフツ運動というこの時代のイギリスの芸術・工芸運動に非常に大きな影響を受け、かつ深い結びつきがありました。

アーツ&クラフツ運動の指導者としてウィリアム・モリスが有名ですが、彼は産業革命後大量生産方式がイギリスを席卷し、そのことによりイギリスの伝統的な芸術精神が失われていったことを嘆き、批判しています。そして田園地方には残っていた土着的な工芸や建築を、復興する運動を展開しました。そうした芸術工芸運動が郊外住宅のデザインにも影響を及ぼし、ここにあるような懐かしい村のイメージが、郊外住宅のデザイン、田園生活の象徴として取り入れられていきます。

先ほどのベッドフォード・パークでは、この地域の伝統的素材である赤レンガを使いながら、田園地方のイメージを取り入れた—芸術の香りのするデザイン—が取り入れられました。自然をよく残しまさに水彩画の中を歩くような、ピクチャレスな景観の住宅地をつくることに成功しています。この住宅地は当時、芸術的な雰囲気を持つ郊外ということで評判になり、後の開発にも非常に大きな影響を及ぼしたといわれています。

### ■ブレンサム田園郊外—パートナーシップのまちづくり第1号

20世紀の始め頃、ロンドンでは田園郊外と呼ばれる計画的コミュニティがたくさんつくられます。ガーデン・サバーブ (Garden Suburbs) と呼ばれるものです。

このブレンサム地区は、その最も初期のものです。

田園郊外はパートナーシップによってつくられたまちです。資本家とここに住む借家人の両者が、共同でまちをつくる仕組みです。具体的には、居住者となるべき借家人と投資家が、ともに出資する組織・非営利会社が住宅を建て、コ・パートナーシップ方式と呼ば

れています。開発による利益を株式配当というかたちで借家人に還元します。そして、住宅地の管理運営にも居住者が参加する仕組みでした。

これには、居住者参画を促すことで、住宅地の環境と資産価値を維持し高めていくねらいがあったわけです。住み手が環境を共有するという考え方にもとづく住宅地です。この方式はその後多いに広まり、質の高い田園郊外が数多くつくられました。イギリスでは既に 20 世紀のはじめの時代に、いわゆる居住者参画のまちづくりが進められていたということは注目すべき点です。

### ■ E. ハワードの田園都市論—真の改革に至る平和な道

次に登場するのが、田園都市です。イギリスのユートピアモデルの最終到達点ともいえるのが、エベネザー・ハワード (Ebenezer Howard) により提起された「田園都市論」です。田園都市論は 1898 年に「明日—真の改革に至る平和な道」と題して発表されました。彼の田園都市論は 20 世紀初めの偉大な発明といわれ、その後の都市計画に非常に大きな影響を及ぼします。

ハワードの田園都市論とはどのようなものなのか。

彼の目的は、そもそも産業革命後の過密・不衛生・劣悪な環境に悩まされてきた大都市と、当時大都市に人口が流出して疲弊していた農村・田園地帯の双方を救うことでした。彼はそれを「人びとを美しい土地 (すなわち、田園地帯) に再び戻すことだ」と言っています。

ここに描かれているのは、3つの磁石と呼ばれる概念図 (ダイアグラム) です。

タウン (都市)、カントリー (田園)、タウンカントリー (都市田園) が人々をひきつける磁石として描かれています。その当時、都市の磁力 (すなわち都市の魅力) があまりに強く、田園から一方的に人口が流出しており、それにより様々な問題が起きていました。そこで、都市の魅力を超える新しい魅力 (都市と田園の魅力の両方を兼ね備えたもの)、第三の選択肢をつくれれば、再び田園地帯に人々が戻るとというのが彼の考え方であり、それが彼の主張するタウンカントリーあるいはガーデンシティでした。

活気あふれる都市的な生活と田園の美しさや喜びが完全に組み合わせられた、あるいは結婚した都市田園部 (タウンカントリー) というものが実現すれば、今申し上げたような大都市の混乱も疲弊する農村の問題も解決できる、真の改革に結びつけられるのだというのが彼の主張であります。

田園都市の概念を示す図です。人口 3 万人ほどの小都市としています。その周囲に永久に保存すべき田園地帯が配置されています。都市の人口に見合う産業を導入し、自立都市をつくります。周りの田園地帯でつくられる農産物が都市全体の食料の自給自足を確保します。また、都市部から生じる生ゴミは農地で肥料として再利用する。今日のいわゆる資

源循環の仕組みが考えられました。この都市、田園を含む一体の地域は、半公共的な組織が一括して所有し経営します。開発によって得られる利益はすべて地域住民に還元するという仕組みです。都市の運営は住民から選出される運営委員会により行われます。人口 3 万人という都市規模は、今日という直接民主主義によって都市が運営可能な規模として定められました。ハワードの田園都市は、いわば地域自主管理の思想による都市です。

### ■実現した田園都市—レッチワースとウェルウィン・ガーデンシティ

このようにハワードの思想には単に都市の環境を改善するというだけでなく、様々な意味で社会それ自体を変革するという思想が含まれていました。ハワードの提案は多くの人の支持を受け、「明日」という本が出版された翌年には田園都市協会という組織ができ、構想実現のための運動がスタートします。

さらに 1903 年には田園都市をつくる最初の会社「第一田園都市株式会社」がつけられ、レッチワースに用地を取得し、計画人口 33,000 人の都市の建設が開始されました。

設計競技（コンペ）が行われ、パーカーとアンウィンという 2 人の建築家がデザインメンバーとして選ばれました。彼らは、レッチワースの地形・既存の樹林・川の流れを活かしたまちのデザインをつくりあげています。

これは上空から見たレッチワースの様子です。ハワードの目指した「田園と都市の結婚」というひとつの理想を実現しているのではないかと思います。

このレッチワースを設計したレイモンド・アンウィンは、後にイギリス都市計画の父と呼ばれることになります。

彼の設計思考は「中世主義」と呼ばれています。中世の村落のスケールにモデルをとって住宅のグループをつくりだしました。中世の村落が持っていた人々の強いコミュニティのまとまりを再現したいという思いが込められています。

2 番目の田園都市はウェルウィン・ガーデンシティです。1919 年から第二田園都市株式会社によって着手されました。第一次大戦の後の話です。ここではルイド・スワッソンという建築家が約 40 年間ひとりで町と建物のデザインを担当し監修したことで有名です。その結果、イギリスで最も快適な住宅地と呼ばれるほど質の高い街並みができあがります。住宅地の緑の豊かさは、まさに田園都市の名にふさわしいものです。イギリスではめずらしい垣根のない景観ができあがっています。しかし、ハワードの田園都市はこの 2 つで、先が続きませんでした。第二次大戦後、イギリスのニュータウンという形で引き継がれますが、ハワードの思想とはかなり違ったものになっていきました。

## ■ハムステッド田園郊外都市—「芸術」としての住まいまちづくり

次に紹介するハムステッド田園郊外（1907～）は先程お話したブレンサムと同じ手法でできあがっています。これは「イギリスの田園都市運動がつくりだそうとした環境の中で、最も完璧な例だ」と言われています。これも、レイモンド・アンウィンの代表作で、世界中に田園都市のイメージを発信し、わが国にも伝えられた、非常に影響力を持ったプロジェクトです。

この住宅地の事業を手がけたのはヘンリエッタ・バーネットという社会運動家です。彼女は当時、ロンドンの西北にあるハムステッド地域の自然環境保全運動に取り組んでいました。しかしその地域の一部が、民間事業者によって単調な条例住宅地として開発されるおそれが生じたため、自らこの土地を取得し理想の住宅地をつくろうと思立ちました。投資家を募って、ハムステッド田園郊外トラストという非営利組織をつくり、事業を着手するわけです。その時に、アンウィンに理想の住宅地デザイン（コミュニティデザイン）を託します。

ハムステッドの自然が保存されている状況を紹介しています。

上の図の向こうに田園郊外の家並みがみえ、ロンドンでも最も美しい場所のひとつです。

すでにお話したように、レイモンド・アンウィンの住宅地デザインは「中世主義」と呼ばれています。イギリスの中世村落にモデルを求めて美しい都市美を現代的につくり出す手法をたくさん試みています。彼は人間が生活する空間をつくり出す、芸術としてのタウンデザイン、あるいはビレッジデザインを確立した人です。後に「実践の都市計画」という膨大な著書を書きました。残念ながら日本語に訳されていませんが、関心がある方はチャレンジしてください。

このバーネットという人は、単に理想の環境をつくるだけではなく、そこに中産階級から労働者階級まであらゆる階級の人たちが暮らす混住社会を理想としました。具体的にはハムステッドのガーデンサブurbには、戸建て・二戸建て・連続建てといった、所得階層に応じた様々な住宅、その他には例えば老人向けの住宅や女性のための共同住宅など、さまざまな住宅をつくりました。残念ながら今はただの高級住宅地となっており、日本の方も大勢住んでいます。

このハムステッドのデザインはロンドン田園郊外のイメージを一躍世界に広げました。この時代、世界中に影響を及ぼした田園郊外や田園都市など、イギリスの住まいまちづくりの成果が、政府や自治体ではなく、例えばこのハワードやバーネットの社会運動や民間の非営利組織によって実現したということは、特筆すべきことと思います。

この1907年に始まったハムステッドの開発を契機に、1909年にイギリスで初めての都市計画法が出来ました。これは、これから開発される予定区域をあらかじめ定めて、その開発の計画方針もあらかじめ定めるという制度でした。提案者の名前をとって「ジョン・バーンズ法」と呼ばれています。

都市計画というものがはじめて法律になるわけなので、当時イギリスの議会で「都市計画とはなにか」という質問がでました。その時にバーンズがここに書かれているように答えています。「都市計画とは、家庭が健全で、そして住宅が美しく、まちは楽しく、都市は威厳に満ちていて、かつ郊外はさわやか」であるようにと言ったそうです。

この言葉は、イギリスの都市計画がその出発点から、健全で美しい住まいをつくるということを基本に考えられてきたことを物語っています。我が国の都市計画とは少し違いがあります。このとき以来、住宅や住宅地が美しくかつ芸術的であるべきだという精神が、イギリスの人々には受け継がれているように思います。

(休憩)

#### 4. 戦間期のハウジング—二戸建のロンドン

##### ■1919年住宅・都市計画法—本格的公営住宅時代の開幕

ここからは1919年、第一次世界大戦後の話です。2度の世界大戦の間（1918～1939年）の間を戦間期と呼んでいます。

1914年ヨーロッパ大戦が始まり、イギリスでは深刻な住宅難をむかえます。この戦争が終わった後、イギリス政府は国の責任で大量の住宅を供給することを決めます。

1919年に「住宅・都市計画法」という新しい法ができ、このときにはじめて自治体の公営住宅に国が全面的に補助をする制度をつくります。これによりロンドンをはじめ、郊外に大量の公営住宅が建てられます。

この時期の公営住宅は決して所得の低い労働者だけではなく、国民全般に向けて供給されました。一方で、戦後すぐに経済復興し、一大住宅ブームが起き、民間業者が競って郊外開発を進めていました。当時郊外電車の発達ともあいまってロンドンの郊外はとめどもなく無秩序に拡大していきます。

これは当時、開発された郊外住宅地の風景ですが、多くの開発がこのような2戸で1つの建物を建てました。イギリスではセミデタッチドと呼ばれていますが、1戸建てよりも立派に見えるためイギリス人には好まれています。このためにこの時代のロンドンは「二戸建てのロンドン」(Semi-Detached London) と呼ばれるようになりました。ロンドン州議会もこの時代、大規模な郊外開発をたくさん行っています。

##### ■ロンドン州議会（LCC）の郊外コミュニティ開発

1919年の住宅都市計画法は「良い計画・良いデザイン・良い建築」という基本原則を掲げていました。公営住宅といえども、水準の高い、質の高い住宅をつくるのだと言っていました。それに従って公営住宅のハウジングマニュアルがつけられました。田園都市や田園郊外のデザインを受け継ぐような質の高いものがつくられた時期です。

ロンドン州議会のつくった住宅地は、住宅そのもののデザイン、街並みのデザイン、いずれの面でも極めて高い水準を一時期維持していました。

しかしほどなくして、財政状況が悪くなり、コストの削減が言われ出します。なによりも当時は大量供給が優先され、その結果次第に単調で退屈な住宅地に変わります。このベコンツリーという住宅地は、戦後すぐ 20 年にスタートしていますが、なんと人口 11 万 5 千人という、低層住宅だけでつくられている大ベッドタウンです。いわば田園郊外を大量にコピーしたような住宅地が出来上がりました。

そしてこういった郊外に住めたのは、ホワイトカラーなどの比較的所得の高い階級であったので、本当に住宅に困っている労働者は相変わらずスラムに取り残されたままではなにかという、住宅政策への批判もでてきました。

#### ■都市再開発（スラムクリアランス）への方向転換

そうした批判を受け、30 年代の公営住宅の建設は、もっぱら過密な労働者住宅街の再開発を中心に切り替わり、住宅に困っている労働者によりやく公営住宅が提供されることになりました。

かつての労働者住宅街を歩くとこのタイプの住宅が数多く残っており、2つの戦争の間に建てられた住宅だということが想像できます。

しかしこの再開発のプログラムは、一方で貧しい労働者階級の人々を特定の地域に閉じ込めるという全く別の効果をもたらし、後の社会問題をつくる原因にもなりました。つまり、タウンハウスの建設によって始まった居住地の階層分離（階層区分）がさらに続き、そして定着していく結果となりました。

### 5. 第二次世界大戦後のハウジングーマスハウジングの時代

戦後のハウジングは、ひとことでいえば大量供給の時代といえます。「マスハウジング」という言葉が使われます。技術が発達して、イギリスではそれまでほとんどなかったコンクリート造の中高層アパートが大量に建設されました。

#### ■公園の中のタワー、垂直田園都市の出現

1950 年代にはいると、イギリスのハウジングは一変します。公園の中のタワー「垂直田園都市」というコンセプトが登場します。このアイデアを最初に登場させたのは、スイス出身の建築家コルビュジェでありました。彼は 1922 年に「300 万人のための現代都市」という提案で当時の都市の改革の方向を示しています。コルビュジェもハウードの影響を受けた人で、田園都市に賛同していましたが、ハウードとの違いは都市の中心部を田園都市にしようと考えたことです。

1930 年代にコルビュジェを中心とする近代建築国際会議（CIAM）という組織が、彼らの

主張する都市計画原理を「アテネ憲章」として発表します。この中心的な思想は、「公園の中のタワー」（タワー・イン・パーク）という概念です。理想の都市の目標とは、緑であり、空間であり、太陽だという説です。住宅にとって最も必要なものは光・空気・眺望で、それを得るためにはこれまでのように車が通る騒音と公害が激しい街路に沿って家並みを建ち並べることは適切ではない、ということが彼らの主張です。そして、新しい技術を最大限に活用して、広い緑地のなかに高層アパートを建てる、そういう主張でした。

1952年になって、コルビュジェの思想を実現する作品が完成します（ユニテ・ダビダシオン フランス・マルセイユ）と、たちまち彼の革命的な提案が世界の先進国に受け入れられていきます。イギリスの住宅地計画にもすかさず影響が現れます。

50年代に建設されたロンドンの団地、ローボロー・ロードは、先ほどのマルセイユの建物とそっくりにつくられています。当時のロンドン州議会の建築家が、コルビュジェのアイデアにいかにも強い影響を受けたかを物語っています。

ロンドン州議会がつくった当時の住宅の中でアルトン団地と呼ばれる団地は、この思想に基づく住宅地のなかで最も成功した例と言われています。この敷地はもともとは貴族の邸宅であり、地形と既存樹木をすべて保存しながら、屋敷のあったところに建物を建てた団地です。

この住宅地は、当時「世界で最も美しいローコスト住宅（公営住宅）」と評判になり、日本の教科書にも載りました。コルビュジェも「これこそが垂直田園都市だ」と語ったとされています。

しかし何でもそうなのですが、丁寧につくっているうちはそれなりのものができてくるのですが、数多く繰り返すにつくられるに伴いその後の住宅地の多くは単調で個性に欠けるもの、同じパターンを繰り返すものになっていきます。問題なのは、伝統的な都市のまちなみの中にこういった不調和な近代都市が出現することです。当時のロンドンには戦災で相当痛めつけられたため、伝統的な街並みが壊れ、その復興としてこのような団地がつくられることも多かったようです。

この写真はリージェンツ・パーク団地です。先程紹介した伝統的な街並み、リージェンツ・パークのタウンハウス群のすぐ隣に建ち上がった再開発です。当時、戦災復興や再開発の事業が数多く行われました。

そうした再開発の前後を比較した図を見ていただきたいと思います。上図が再開発前の伝統的な街路網（あるいは小さな街区）によってできたまちです。それが下図のように大街区（我々はスーパーブロックと呼んでいます）、広々としたオープンスペース、そしてその中に垂直田園都市というものとなりました。冒頭にお話しした街路建築によるまちから垂直田園都市へとつくりかえられています。まちが革命的に変化したことがよくわかると思います。

よく見れば新しい住宅地にはかつてのタウンハウスがつくっていた通りが消えうせているわけで、通りでの生活、通りのコミュニティ、あるいは通りに沿ってつくられていた街並みがありません。先程のアテネ憲章に書かれていたように、通りに家並みを連ねることは好ましくないという思想の表れです。

これも同様の例ですが、マンチェスターの伝統的な労働者のまちを再開発した地区です。先に紹介したジェーン・ジェイコブスは、このようなスーパーブロック型のまちづくり・再開発は、都市の生活やコミュニティを破壊し、結果的には都市を衰退させるという警告をし、痛烈に批判しています。通りの大切さ、小規模街区の重要性を、1961年に主張しています。「アメリカ大都市の死と生」という本に書きました。

その後、これらの地区では彼女が予言したとおりのことが起きてきます。

### ■ マスハウジング—規格化、巨大化、工業化の進展、大量生産品としての住まい

マスハウジングという言い方をしますが、60年代以降には、低所得者の住宅を大量に効率的に建設するために、住宅の規格化・標準化ということがすすめられました。日本も1960年代に千里ニュータウンができた頃には、すべて公共住宅は標準設計でつくりました。それと同様のことを彼らも60年代に進め、かつ高層化・巨大化を進めていきます。さらにプレハブ工法（システムビルディング）という工業化工法が大々的に取り入れられ、大量供給が可能になります。どれをみても皆同じ規格化された箱型のコンクリートアパート、工業製品のような大量生産品としての住まい、それによってつくられる無味乾燥な環境の時代が訪れます。この時代の住宅地からはレイモンド・アンウィンが主張したような生活の楽しさや住宅は美しくというイギリスの精神も感じられなくなっていくます。

50年代の後半から、公営住宅の建設はもっぱら不良住宅地の再開発に集中します。そのためこの種の住宅は、かつての労働者住宅街に集中しています。今でも、主にロンドン東部・南部を歩くと、こういう住宅が大量にあります。

実は高層住宅やシステムビルディングの工業化住宅は、住人からは極めて不評・不人気です。これは後から伝えられていることなのですが、60～70年代にかけて建設された住宅地の中で「これは人間の住む場所に相応しくない」と住人自らが宣言して、大量に一斉退去したという事例があるそうです。そのまま空き家になって壊された住宅を私も見ました。

### ■ メガストラクチャー、一つのビルディングとしての都市

それにもかかわらず近代建築家は、さらに自分たちの思想を発展させていきます。巨大な建物の中に人工の土地、人工地盤をつくったり、空中に人工の通り、空中街路（Street in Air）をつくったり、巨大な建物でひとつの都市を造ろうと考えます。これを今ではメガストラクチャーといたりします。

イングランドの中部にシェフィールドという町があり、そこのパークヒルという住宅地

は空中街路のコンセプトをいち早く実現しました。人々が往来する通りを空中に設け、これにより高層住宅群を結びつけました。約 1,000 戸の住宅がここにありますが。この住宅がすべて空中の通りに連なっていて、空中を通って学校やショッピングセンターなどの町の中心部に集まることができるようになっていました。まさにひとつの建築が街をつくっているという姿です。

このパークヒルの団地は革新的な住宅地として世界の注目を集め、多くの賞賛を浴びました。いまではイギリスの近代建築を代表するものとして国の指定保存建築になっています。

このシェフィールドの住宅建築の影響は多大なもので、その後ロンドンにも高層住宅を空中街路で結ぶような住宅地が多くつくられました。シェフィールドの通路は街路のごとく非常に幅広く眺めよくつくられていましたが、しかしその後につくられたものは、大半がこれを単に形式的に真似たもので、意味もなく延々と住宅を繋いでいるものになっていきました。

このタイプの住宅は見知らぬ人がどこからでも簡単に侵入できる住宅で、犯罪に対しても無防備で常に住宅の中で緊張を強いられるような危険な存在になります。事実、70～80年代になると犯罪多発団地になりました。いずれにしても、こういう住宅が大量に建設されてイギリスの都市やまちなみが激変するという時代がありました。

## ■ハウジングの方向転換—再び都市を造る住居へ

そして1968年、ちょうど私が大学を出て仕事についたころですが、ロンドンで当時の住宅政策の方向転換を迫るような事件が起きます。

ここで写真を紹介しますが、ロンドンの東部、ローナンポイントという所で、高層プレハブ住宅の上層階でガス爆発が起きます。そのために、上から下までの階が一瞬にして崩壊し5人の住民が死亡しました。

それまでも高層住宅は住民にはいたって評判が悪かった。維持費や管理費が高い上に、精神的ストレス、子供の発達への影響、犯罪の多さが批判されていましたが、この事件を契機にして、イギリスでは高層住宅の建設が激減する状況となります。ロンドン州議会も70年代の後半になり、いままで進めてきた「高層化・工業化・スラムの全面再開発、こういったものが政策的にミスジャッジだった」という反省を表明し自己批判をして、新しい方向を探る時代に入っていきます。

その後のハウジングのつくり方は、それまでのいわゆる公園の中のタワーといった考え方を見直して、新しい方向性を探るようになりました。

いま見ていただいているプロジェクトでは、たとえば伝統的な素材を求めて、どこにもあるコンクリートの箱型を脱却し、その地域に相応しいものとする。あるいは、高層化を避けてヒューマンスケールの街並みにしていく、通りのにぎわいをつくりだし周辺と調

和した街にしようという、そういった時代が変わっていきました。

あるいは小規模開発で、路地や小さな広場を取り入れ身近なコミュニティをつくるという試みが行われました。かつてのタウンハウスのように、通りに面して連続的な街並みをつくるようなつくり方、前段で申し上げたような「都市をつくる住居」に立ち戻るといった計画も出てきました。総じて言えば、伝統的な住まいまちづくりが再評価されることになったと言えます。

## 6. マスハウジングの修復—団地再生の展開

そうこうするうち 80 年代をむかえます。80 年代になるとイギリスの公営住宅団地に深刻な社会問題が生じるようになります。イギリス経済を支えてきた産業革命以来の伝統的な製造業が、70 年代になると、国際競争力を失い衰退にむかいます。その結果、多くの労働者が職を失います。労働者の多くは都市内の公営住宅地に住んでいますから、そこに失業や貧困が集中し、その結果、暴力的な環境破壊や犯罪が顕著になってきます。他方、途中でふれたように、プレハブ工法で大量につくられた住宅は品質が非常に悪くてそれ自体が問題でした。とりわけ高層住宅や巨大な住宅地は、すさんで荒れ果てた状態になってきます。そういう状態を改善するため、80 年代の半ばから一当時はサッチャー政権でしたが一本格的な公営住宅の団地再生が始まります。大量生産時代のハウジングの失敗を修復し、人間らしい住まいを取り戻す取り組みです。

どのような取り組みか少し紹介したいと思います。

### ■人間スケールの回復—高層建築、巨大建築の解体

まず、人間スケールに馴染まない高層住宅地を解体し、中低層住宅地に建替えます。現在のイギリスでは、高層住宅は人間居住に相応しくない、とりわけこどものいる家族には適さないという考え方が定着しています。

住宅を解体している写真がありますが、これは先ほどご紹介したシェフィールドのパークヒルと同じ考え方でつくられたハイドパークという住宅地です。90 年代に取り壊される運命になりました。一部修復して単身者用住宅などに変えられましたが、イギリスでもエレベーター付きの住宅ということで、高層住宅の一部は、高齢者向けのサービス付き一軒家付き住宅などに活用されています。しかし家族の住まいとしては存在を否定されています。途中でみていただいたロンドンの高層住宅・チャークヒルという団地です。高層の連続する住棟群は、いまは影も形もなくなっています。

ストーンブリッジ団地、これも全体を取り壊し中です。こうしてイギリスのいたるところで、高層住宅の解体、低層中層住宅への建替えが進んでいます。

## ■伝統的な街路網、街路建築、街並みの再生

もうひとつは、伝統的な街路網、あるいは街路建築、都市をつくる住居を再生させようという動きです。大街区（スーパーブロック）をつくって、大きなオープンスペース（公園）の中にタワーをつくってという戦後の団地計画が否定されつつあります。かわって伝統的な街路網、小規模街区、かつてのタウンハウスに代表されるような街路建築のよさを再評価する考えが支配的になっています。

これは途中でも紹介しました団地（ホリーストリート団地）ですが、一時スラムクリアランスでスーパーブロックになったこの団地もその後著しく荒れ果てて、今2度目の再開発によって元通りの街路パターンに戻っています。住宅はいずれも通りに面して正面を向く街路建築で、連続的な街並みをつくっています。住宅のデザインもかつてのコンクリートの箱からイメージを一新しています。

これも途中で紹介したマンチェスターの労働者住宅地（ヒューム地区）の歴史的な変遷を示しています。

一番左側の図が19世紀の労働者タウンハウス住宅地時代の状態、中図が60年代からの再開発によるスーパーブロック、そして右図が90年代の再び団地再生でできあがった伝統的なまちなみという経過です。

## ■まちの個性、コミュニティの誇りの創出

さらに、まちの個性、コミュニティの誇りを生むデザインが重視されるようになり、かつての個性に乏しいコンクリートの箱型アパート、一目で公営住宅とわかるようなデザインは影を潜めるようになりました。かつての大量生産時代の住宅が大きく姿を変えつつあります。

## ■民間非営利組織によるまちづくり、居住者参画のまちづくり

そして、これら80年代からの団地再生は、公営住宅の再生ですが、自治体ではなく、住宅協会という民間の非営利団体によって行われています。お役所仕事ではなく、ミッションを持った民間組織のほうが効率的で、住民のニーズにもよりの確に対応できるという考え方に基づいています。従って今イギリスでは、再生された団地は公営住宅（Public Housing）とは呼ばれずに社会住宅（Social Housing）と呼ばれるようになりました。

今日の団地再生では、住民が主体的に参加し、そのニーズや意志を反映させることが不可欠になっています。この仕組みをコミュニティ・アーキテクチャーと呼んでいます。かつての田園都市や田園郊外での民間非営利の組織によるまちづくり、あるいは住民の自主運営によるまちづくりへ、いま歴史的に回帰しているようにも思えます。

## ■様々な階層の人々が共生するコミュニティ

公営住宅はかつて所得の低い労働者が集まって住む住宅でありましたが、近年の団地再生では、様々な年齢・家族・所得階層の人が共生するコミュニティをつくることが重視されるようになりました。それこそが、コミュニティを持続可能にしていく不可欠な方策だと考えられるようになり、バランスのとれたコミュニティをつくることが一つの目標になっています。また、社会住宅と同時に市場家賃の賃貸、あるいは分譲住宅と一緒に混ぜていくのですが、住宅のデザインによってそれらが区別されることのないようになってきました。

かつてハムステッドの田園郊外、あるいはハワードの田園都市で主張された混住社会が再びよみがえっているように思えます。

80年代の半ばから約20年、公営住宅を中心にした戦後のまちづくりが大きく変化しつつあります。

## 7. 次世代まちづくりへの取り組みーアーバン・ビレッジとミレニアム・コミュニティ

最後に、最近の住まいまちづくりについて紹介したいと思います。

イギリスのチャールズ皇太子は、かねてから建築やまちづくりに関心があり、発言し行動することで知られています。特に、モダン、ポストモダンと呼ばれる建築がロンドンなどの秩序や伝統がある景観を破壊したと非常に批判しています。ずいぶん前ですが自ら『英国の未来像』という本を出版して、建築とまちづくりの原則を提示しています。例えば、風景との調和、人間の尺度、芸術との統合というような、彼が考えるまちの美しさの基準を主張しています。

同時に自ら率先してアーバンビレッジ・グループという団体をつくり、自らまちをつくることによって、これからのまちづくりを示していくという新しいまちづくり運動も行っています。彼らの主張はイギリスの伝統的なコミュニティを再評価して、その利点をこれからの都市の再生や持続可能な都市づくりに活かすべきだというものです。

このアーバンビレッジ・グループのまちづくりで代表的なものがパウンドベリーというまちです（イギリス南西部にあるドーセットの町）。

たとえば、伝統的な素材、建築様式を大事にしましょう、芸術性を重視しましょう、様々な階層の人が交じり合って住むようなまちづくりをしましょう、持続可能なコミュニティをつくらう、といった彼らの主張を忠実に表しているまちづくりです。

どこか田舎の村落をイメージさせますが、ちょっとテーマパーク的で違和感を持つひともいるかもしれません。

いずれにせよアーバン・ビレッジという思想は、イギリス政府の政策にも取り入れられるようになりました。

一方、イギリス政府は97年からブレアの労働党の政権です。彼らも97年から「ミレニアム・コミュニティ・プログラム」というモデルプロジェクトを進めています。21世紀に

ふさわしい持続可能で環境に責任のあるコミュニティのあり方が問われています。そして、同時にすぐれたデザインを実現する、ということを目指してスタートしています。最も早くにスタートしたのはロンドンの「グリニッジ・ミレニアムビレッジ」です。特に資源、エネルギーを節約する、再利用する、そして様々な階層の人が一緒に暮らす、歩いて暮らせる生活圏をつくることが主張されています。いま、全国で7箇所、様々なタイプのまちが、ミレニアム・コミュニティということで取り組みを進めています。

以上、イギリスの住まいまちづくりのお話でした。

## おわりに

もう一度ジョン・バーンズの言葉を繰り返したいのですが、「住宅は美しく、まちは楽しく」という精神で、イギリスの人々は住まいまちづくりに多くの努力を傾けてきました。そういう意味で、我々もイギリスに学ぶべき点が多くあるのでないでしょうか。

冒頭に申し上げたように、美しい都市は必ず美しい住宅によってつくられます。ですから我々は美しい住まいづくりに取り組まなければなりません。日本のまちをより美しく、楽しくしていくために、それが必要だと思います。ところで、では何をもって美しい、楽しいまちなのかという重要なテーマがあります。今日そのことについては詳しくふれることができませんでしたが、是非この機会にみなさんも考えてみてください。それぞれのまち、それぞれの地域で美しい住まい、楽しいまちというのは何であるのかということ議論することから日本のまちは変わっていかないといけないのだらうと思います。

これで私の話を終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

## Ⅲ 質疑応答

司会：どうもありがとうございました。それでは何かご質問や感想があればお願いします。

質問者1：途中の段階で、イギリスのまちづくりの図がでてきて、事業者と住人の関係図が出てきましたが、日本の場合はどうなっているのでしょうか。具体的に佐藤先生が日本で仕事をされるときにどうされているのか聞かせてください。

佐藤：様々な場面があります。例えば、大阪でいえば千里ニュータウンや泉北ニュータウン、いま北大阪では「彩都」というニュータウンがつくられています。このニュータウンはそこに住人がおらず、山を切り開いて新しいまちをつくるので、一般的にはなかなか住人の方と一緒につくるわけにはいかないまちづくりです。しかし、すでに人が住んでいる地域のまちづくりは違います。わたしたちが最近経験したところでは、12年前の阪神淡路

大震災の復興があります。住人の方と共に考えながら進めないと実現するはずもないまちづくりでした。商店街を再建・活性化することもそうだと思います。

イギリスと同じく日本にも多くの公営住宅があります。千里ニュータウンなども今から団地再生に向かいます。ここでも住民参加は不可欠です。例えば、老朽化した分譲マンションの建替えのお手伝いもしますが、これも、ひとりひとりの区分所有されている権利者の方々の意向がまとまらなければ何一つ実現しませんから、専門家と居住者の方、そして事業協力の民間事業者などの協働でまちができていくことになります。

質問者2：建物の設計はされるのですか。

佐藤：私の会社の場合は都市計画と共同住宅の設計を一緒にします。都市計画を中心にするひと、建築の設計を中心にするひとなど、専門家にもいろいろな立場の方がいます。コミュニティ・アーキテクチャーと呼ばれるイギリスのまちづくりの場合には、やはり都市計画家や建築家が、住民組織やコミュニティ・デベロッパーと呼ばれる住宅協会などの、住民参加型のまちをつくっていく事業主体と協力して仕事を進めます。そういう人たちの協働によってまちづくりが進んでいきます。

質問者3：非常に興味深いお話しでした。特に後半の高層住宅の変遷あたりを興味深く聞かせていただきました。漠然とした質問になってしましますが、はじめの丁寧につくっているうちはいいけれども、その後になぜかはじめの精神が忘れ去られてちょっと違うものになってきてしまうというのは、いろいろなケースであったと思いますが、なぜそうなるのでしょうか？

佐藤：そうですね。私たちも常に反省すべきところがあると思うのですが、「初心忘るべからずですね」(笑)。

それは人間も組織もみな同じなのだと思います。千里ニュータウンをつくった頃も大量供給が必要だったという日本の社会的な背景から、あれだけ大規模な住宅地をつくったのです。しかし当初の人たちは非常に丁寧に、当時の技術、知識、最善のものを生かしてつくられたと思います。ですから、大量につくるということだけで、ものを丁寧につくらないと決めつけられるものではないと思います。やはり人の心がけ、丁寧に・大切につくるという気持ちを忘れてはいけないのだと思います。いつの間にか繰り返し作業になってしまうことが我々にもあります。逆に、ご忠告ありがとうございました。(笑)

司会：最後は哲学的な話となりましたが、時間となりましたので、これで「世界の住まいまちづくりセミナー1 イギリス編」を終わります。最後に佐藤先生に盛大な拍手をお願いします。(終了)